

旅人

湯  
川  
秀  
樹

旅  
人

ある物理学者の回想

朝 日 新 聞 社

旅 人 ある物理学者の回想

昭和三十三年十一月三日 第一刷発行

定価三〇〇円

著 者 © 湯川秀樹

発行者 朝日新聞社  
李家正文

印刷者 大日本印刷株式会社  
長久保慶一

発行所

東京有楽町 朝日新聞社  
大阪中之島 小倉砂津

## 目次

|       |     |
|-------|-----|
| はじめに  | 一   |
| 知恵の故郷 | 七   |
| この父   | 二七  |
| 言わん   | 五二  |
| 染殿町   | 七二  |
| ある航海  | 九   |
| 波と風と  | 一三  |
| エピソード | 一四五 |
| 青春    | 一五九 |

|   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|
| お | 苦 | 転 | 結 | 狭 |
| わ | 楽 |   |   | い |
| り |   |   |   |   |
| に | 園 | 機 | 晶 | 門 |

|   |   |
|---|---|
| 中 | 表 |
| 扉 | 紙 |
| 絵 | 題 |
|   | 字 |

|   |   |
|---|---|
| 向 | 湯 |
| 井 | 川 |
| 久 | 秀 |
| 万 | 樹 |

|             |             |        |             |             |
|-------------|-------------|--------|-------------|-------------|
| 二<br>八<br>三 | 二<br>五<br>三 | 三<br>元 | 二<br>〇<br>三 | 一<br>七<br>九 |
|-------------|-------------|--------|-------------|-------------|

は  
じ  
め  
に





昨年（昭和三十二年）の一月、私は満五十歳の誕生日を迎えた。つまりその日までに、私はちょうど半世紀を生きて来たことになる。

私の歩いて来た道は、普通の意味では別にけわしくはなかった。学者の家に生れ、後には、それぞれ違った方面の学者となった兄弟たちと、一しょに育ってゆく過程において、また自由主義的な色彩の濃い学校生活において、世俗的な苦勞は少なかった。環境的には、むしろ恵まれていたといった方がいいかもしれない。

しかし、「学問の道では」と聞かれると、簡単には答えられない。好運だったとも思えるが、人一倍、苦勞したことも否定出来ない。何しろ原子物理学といえ、二十世紀に入ってから急速に進歩した学問である。その上げ潮の中で、自分の好きなことを自分の好きな流儀で、やって来ただけだともいえよう。ただ、私は学者として生きている限り、見知らぬ土地の遍歴者であり、荒野の開拓者でありたいという希望は、昔も今も持っている。

一度開拓された土地が、しばらくは豊かな収穫をもたらすにしても、やがてまた見棄てられてしまうことはないではない。今日の真理が、明日否定されるかも知れない。それだからこそ、私

どもは、明日進むべき道をさがし出すために、時々、昨日まで歩いてきたあとを、ふり返って見ることも必要なのである。

上に述べた二つの道はしかし、実は重なっている。私が学究者として成長して来た道は、同時に、人間として歩いて来た道である。

二十年近くの間、私は随筆の形で、簡略にはあるが、自分の過去について何度か語った。そしてまた、私以外の多くの人の手によっても、私のことがいろいろと書かれて来た。私の評伝といったものも、五指に余る。世間は私という人間の上に、今では一応のイメージを作りあげてしまった。そのイメージが、どこまで正しいか、一つの判定資料を提供したいと思うのである。

ある人が、鏡に向って自分の顔を見る。それは他人が見たその人の顔でもある。ところが、自分が他人の目に見えない自分の本質について語る時、聞き手は意外な顔をするかもしれない。主観と客観の一致は、この場合むずかしいのである。ことに私は生れつき、自己を表現することに困難を感じる人間である。それにまた自意識過剰の人間でもある。自分を客観的に見ようと努めながら、自分でそれを裏切ることになるかもしれない。

とにかく、何が生れて来るか、私にもはつきりとは分らない。五十歳を迎えるころに、そこはかとなく芽生えた希望を、たまたま朝日新聞が満たしてくれることになった。以来一カ年、私は余暇をさいて、準備をつづけた。そして二カ月前、五十一歳の誕生日を迎えた。

私は私の近親の人たちに迷惑を及ぼさない限り、彼らのことも一しよに書くつもりである。学校の先生や友だちも登場するであろう。この回想の大部分は湯川秀樹ゆかわひでき自伝というよりは、小川秀樹とその周囲ということになるだろう。「小川」は、私の生家の姓である。

さて、小川秀樹は明治四十年（一九〇七年）当時の東京市麻布区市兵衛町あざぶ いちべえに生れた。歳ごとに紅梅の美しくにおう家であった。



知恵の故郷





私の故郷を京都だと思っている人が、今でも少なくないようである。

なるほど、私は五十年に余る歳月のうち、大部分を京都ですごして来た。

学校は小学校から大学まで京都。大学を出て、一時、大阪や阪神間にいたことはあるが、やがてまた京都に帰って来た。先年、アメリカからもどった時も、列車が東山のトンネルを抜けた時に漸く、

——ああ、帰って来た。

と、思ったものだ。

しかし、生れたのは疑いもなく、東京である。麻布市兵衛町二番地。この高台にあった家を、私は少しも記憶していない。そこに咲いた梅の花の美しさも、母から聞かされて、知っているだけである。しかし、私はいつしか、この梅の花をこよなく美しかったものと、思いこんでしまった。そしてそれは、自分の出生を自ら飾ろうとする無意識の働きでもあったろう。

私は麻布の家に、誕生後一年と二カ月しか住んではない。当時、地質調査所の所員であった父、小川琢治たくじが、京都帝大の教授となって、一家をひきつれて赴任してしまったからである。京

大の文学部——当時の文科大学に初めて、地理学の講座が設けられた時のことである。

麻布の家の辺りは、震災に遭って、今ではすっかり相貌さうぼうを変えてしまった。

もとは、余り広くない坂道を登って行ったところ。その一画に、団琢磨だんたくま氏の家が合った。柳兼やなぎかね子さんの家も、大きくて立派な家だったそうだ。

私は幼いころ、母にせがんで、生家の模様を聞きたがった。

母は、

「その家は、まだ大きな家ではありませんでした」という。

「でも、日当りのいい、住みよいお家でした。あなたの生れたのは大変に寒い日で……」

寒かったのは当然である。一月の二十三日である。梅のつぼみも、まだ固かったであろう。

長兄芳樹よしきが数え年で六つ、次兄茂樹しげきが四つだった。兄たちにも、この家の記憶は薄い。長兄の更に上に、香代子かよこと妙子たえこの二人の姉があつた。この姉たちは、今でもその家を記憶しているという。が、五十年前の記憶などというものは、そんなに確かなものではないだろう。

京都へ引越し荷物を送り出してから、一家は新橋駅前の旅館に泊ったそうだ。

「夜、汽車の線路が遠くまで光っているんだ。その青い色を、いまでも覚えてる」

と、兄茂樹は言うが、出発は三月末、まだいくらかはだ寒い夜であつた。

明治四十一年といえ、日露戦後いくら経たない時だ。日本人の気持はたかぶっていたであろう。が、新橋駅付近は、今から思えば想像も出来ないほど暗かったのではないか。古く、天井も低い旅館のランプのもとで、家族たちはそれぞれの胸に、新しい出発への期待や不安を抱いたことであろう。——いや、あるいはもう暗いタングステンの電灯くらいはあったかも知れぬ。しかし、私の記憶は京都に移った後から始まる。やはり、京都が私の故郷ということになるのかもしれない。

私の記憶の中で一番古いと思われるものは、母の背におぶさっている自分の姿である。

たしか、京都駅のプラットホームから、駅の本屋を結ぶブリッジ。その階段を、母は私を背負って歩いていった。私は眠たくて、うつらうつらしていた。初めて京都についた時には、少し記憶がはつきりとしすぎている。ブリッジの汚れた天井と、すすけたガラス窓も見えるが、多分、もっと後のことになるだろう。汽笛の音や、汽関車の蒸気を吹く音も、鳴っているかのようだ。

もう一つ、同じような記憶。それは家の縁側でだれかの背におぶさっている場面だ。家族が多いので、女中が何人もいたそうだから、女中の背中だったかもしれない。私の耳にきこえて来るのは、ねむたい子守うたであった。私は、うつらうつらとしていた。庭には一面にこけが生えている。その上に薄い陽が射していた。庭の向うに、白壁の土蔵が明るい。どうも、これはもう少

し後に出てくる染殿町の家らしい。

京都に着いた一家に、まだ入るべき家があった。御所に近い柳風呂町の円覚寺、その一部を借りる予定だったが、寺の方の準備が整っていなかったらしい。

一家は、三条麩屋町上ル西側の、沢文旅館に一応旅装を解いた。

旅館では、広い一部屋を開放してくれたそうだが、なんとと言っても手ぜまな旅館ぐらしである。母の気苦労は、大変だったらしい。

父は、新しい仕事の準備もしなければならぬ。机に向っている父の傍では、学齡前の男の子が二人、遊びまわる。兄弟げんかもしただろう。赤ん坊の私が時々、泣きわめいていたに違いない。

落ちつかない宿屋ぐらしの中で、思いがけない災難が降ってわいた。一夜、父琢治が、高熱に襲われたのである。

「腕が痛い」

と、最初、父はいった。

長い旅で、重い荷物を手にさげたりしたから、疲れたのではないかと母は思った。が、父の顔はたちまち熱を帯びてあからみ、

「痛みが普通ではない」